

# 京都のキリシタン遺跡

海老沢 有造

## 京都開教

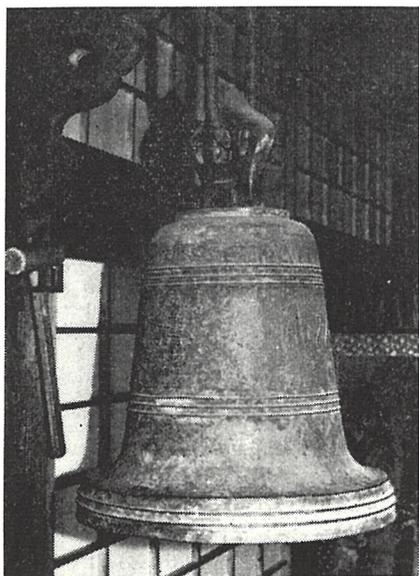
一五四九年、鹿兒島に渡来したサヴィエルは一刻も早く京都に上つて、皇室または將軍家に教えを説き、布教の許可を得ようと考えた。また日本宗教界の中心、特に伝え聞く比叡山の大学に赴いて、真理を論じ、以つてキリシタンの福音を天下に高からしめようとの使徒的野心を抱いていた。が、戦国もたけなわのそのころのこととて、なかなか思い通りに事が運ばなかつた。ようやく一五五一年一月、長い苦難の旅の末、堺からある武士の従者となり、荷物を背負い、徒歩で入浴した。その時、堺の豪商日比屋からミヤコの知人にあてた紹介状を貰つていたので、その家を訪ね、欲待されたという。この知人は小西隆佐と推定されるが、まだ彼の家の所在は確

かめられない。その人の紹介で、延暦寺と交渉すべく、坂本に住む女婿の許に案内された。恐らく三条から山科・大津を経て坂本に赴いたものであろうが、比叡山には登らなかつたようである。結局むなしく京都に戻り、朝廷への接近を試みたが、衛士ににべもなく逐い返されてしまった。こうして上洛後、わずか十一日でサヴィエルはミヤコを後に、鳥羽から小舟にのり淀川を下つたのであつた。その後一五五四年、邦人修士ロレンソは単身、比叡山に上り、役僧に会見して小手しらべをしたが、一五五九年十月、パアデレ・ヴィレラとともにいよいよ京都布教に乗込んだ。この時のコースは堺、小坂、山崎、六地藏、醍醐、山科、大津、坂本という道であつたが、もちろん延暦寺から布教許可を得られはらずもなく、一月余の後、京都に入り、あ

る老尼の庵の倉に宿を得た。それから二カ月の間に転々と二回も宿所を変えねばならなかつた。不幸にして、これらの所在は今となつては確かめるすべもない。翌年一月二十五日彼らは四条新町西入草柳町の山田の後家の家に移り、公然布教を開始した。明らかに知られる京都最古のキリシタン遺跡である。そこでまた迫害をうけ、三カ月後には六角通室町西入玉蔵町の家に移り、同年末、また迫い立てられて四条烏丸町——恐らく烏丸上町——に移つたが、そこも僅か一カ月、一五六一年晩春のころ、ようやく四条坊門（蛸薬師通）室町西入姥柳町の古屋を購入、始めて自前の聖堂を持つことができた。正式の最初の教会堂であつた。

## 京都商蜜寺

その後も京都のキリシタンは戦乱と迫害のために教勢が伸びなかつたが、信長の支配がようやく固まつてくるにつれて上昇の機運に向い、一五七五年には一挙数百名の受洗者があり、老朽した聖堂は強風で倒壊する危険も感ぜられる有様であつたので、高槻城主高山右近ら、近接地区の有力キリシタンらの協力



妙心寺春光院の鈴鐘

の下、新聖堂を建立することとなり、同年末姥柳町の地に起工、一年ほどで落成した。いわゆる南蛮寺である。俗史類の記すような四町四方の大伽藍ではなかったけれども、城郭風の三階建て、洛中ではもつとも高い建築であり、その評判は全国に喧伝された。(京都市の「南蛮寺址」の立札の解説及び年代考証は誤りがある)

またそのころ、教会から三、四町下とあるから、おそらく綾小路・仏光寺通、室町・新町間に五十間に三十間という広い地所を購入し、教会墓地を作り、クルスを一基建て、墓

守の老人を置いて管理したことが伝えられている。この付近の建築や道路工事の時、注意して欲しいものである。

こうして京都キリシタンの最盛期を迎えたのであるが、一五八七年七月、秀吉は島津征討を終えて博多に滞在中、かの伴天連追放令を発し、長崎・京坂の南蛮寺を没収、やがて破却してしまったが、京都南蛮寺の唯一の遺品と推定される鈴鐘が、めぐりめぐって現在は妙心寺の春光院に伝えられている。1577の年号とイエズス会の紋章がある。

この時の迫害以来、キリシタンらは、当時戦火に荒廃のまま取り残されていた松原・高辻、新町

・西洞院間の一劃に移り住むようになり、そこは「だいうす丁」と呼ばれた。デウス(神)に提字子と宛字したことから、キリシタンを「だいうす」と言ったもので、『京雀』によれば、釜座突貫通高辻下る(仏具屋町)に当り、古地図にも記されている。

### キリシタン遺物の所在

一五九〇年七月、かの天正遣欧使節が長崎に帰朝、翌年二月、巡察師ヴァリニャーノに率いられて上洛。鳥羽から黒田孝高の世話により用意された馬や輿の行列をととのえ、堂々と入洛した。巡察師はインド総督使節としての資格であったので、立派な邸宅を宿舎として供された。それはフロイスによると秀吉の旧邸のごとくに推定され、少年らはこれと向いの小西行長の常宿に泊ったという。これらの位置は後考にまちたい。三月三日、彼らは聚楽第に参入したが、「時慶卿記」によると、公卿たちが円福寺前通りで、この行列を見物した。この時の国書は明治の末に東山区の妙法院から発見され、それに対する返書草稿は相国寺の承兌により起草され、富岡謙蔵氏の所蔵するところとなったが、現在は天理図書館の蔵となっている。なお、彼と南禅寺金地院の崇伝らが、秀吉さらに家康の信を得て外交事務に当たったので、その記録「異国日記」や「異国御朱印帳」などキリシタン関係の重要文書が、金地院に所蔵されている。

なお少年使節に関して言及せずにはおれな

いものに、京都大学の国史陳列館所蔵の關係文書がある。イタリヤから回収したもので、大村・有馬・大友三侯らから、ローマ教皇やイエズス会総長に宛てた挨拶や礼状である。この他同館には高槻在の東家発見のサヴィエル画像や十五玄義図、その他の教書類が所蔵されており、アーネスト・サトウが蒐集した百数十冊のパアドレの報告書簡類の古刊本も所蔵されている。また京都市内で発見されたキリシタン墓碑が所蔵されており、遺跡ではないが、必見の場所というべきである。ついでにこれらの墓碑の出土地を挙げて見ると、御前通下立売下る延命寺付近の竹藪中に遺棄せられていたもの三基。一条通大將軍社前の成願寺境内発見の一基。天神筋通下立売下る東側の廃寺浄光院境内発見の一基。下京の唐橋平垣町の小溝の石垣中から発見の一基。等持院南町仁和寺道から等持院に通じる橋梁の石垣に利用されていた一基。大將軍西町の椿寺（地藏院）境内発見の一基などで、成願寺を中心とする一帯に散在していたものが多い事が知られる。この辺りにも慶長期にキリシタン墓地があった事が推定せられる。なお京都博物館南庭にも一基のキリシタン墓碑がある。

## 二十六聖殉教者

天正少年使節の謁見により、キリシタンは一陽來復の感があったが、フィリピンとの交渉がもつれ、その使節としてフランシスコ会士ペドロ・パウチスタらが一五九三年來朝。長谷川法眼の世話で一屋をあてがわれたが、本国請訓の間、布教に従い、翌年八月には前田玄以の世話で西郊に廃寺跡を与えられた。寛永・慶安ごろの古地図によると四条堀川西入るの地に「大うす丁」の名が見えるから、あるいはそこであつたらう。そこにはやがて療養院も設けられている。

一五九六年、土佐に漂着したサン・ヘリーペ号事件から秀吉の態度が硬化し、同年末京坂のフランシスコ会士に弾圧の手が下つた。ペドロ・パウチスタら同会士十六名、同会の事業に奉仕していた邦人十五名に、進んで縛についたイエズス会邦人修士三名、計二十四名は一五九七年一月三日、左耳を削がれ、車にのせられ、一条通りから下京、伏見と洛中引廻しの上、二月五日、長崎で十字架につかれ殉教した。いわゆる日本二十六聖人である（途中、邦人信者二名が加えられた）。「孝高日

記」「言経卿記」「義演准后日記」など当時の公卿日記にも、この引廻しのことが見えている。

## 南蛮寺の再建

この殉教を免れたフランシスコ会士ヘロニモ・デ・ヘスースは一五九八年五月潜入、京都付近に潜伏、同年秋、秀吉の死による局面の転回を期待して、伏見城に家康を訪ね、ルソン貿易の斡旋を買って出て、一旦マニラに帰り、一六〇二年数名のパアドレを率いて再来、翌年には京都の聖堂を再建し、小病院を付設、伏見にも住院と癩病院とを設けた。前者は恐らく四条堀川の「大うす丁」であつたろうが、後者の所在は未考に属する。イエズス会も新政権に接近して全国的に布教を再開しようとした。それにはいわゆる南蛮寺の再建が先決であつた。まず伏見に立派な住院を建て、慈悲の家と呼ばれた慈善事業も設けたが、京都市内のは、仮聖堂にすぎなかつた。やがて起つた関ヶ原の役に、キリシタン大名小西行長は敗れて、六条の賀茂河原の露と消えたが、その信仰に生きた従容たる死は、京童を感嘆せしめたものであつた。さて翌一六〇一年にイエズス会は始めて上京に住院を

設け、一六〇五年には新南蛮寺を建てた。この位置をパアデレらは明確に記録していないが、「京都古町覚書」に一条油小路。「雍州府志」は、そこから堀川にかけて「徒斯辻子」を挙げていることなどから、一条油小路と認めることができる。前記成願寺近傍からキリシタン墓碑が多く見出されたことも、この新寺の近くに彼らの墓地があったものと思わしめられる。しかしまた上京のは小住院であり、主な住院は半里ほど離れている下京にあったという一六一年の外国側史料があり、いわゆる新南蛮寺は、「京都古町覚書」「六角町記録」などに一条油小路と並べ二大寺として記している。五條西洞院、すなわち「だいうす丁」と呼ばれていたキリシタンの集落中に設けられた可能性が強い。この新南蛮寺にはコレジョ(大学)数学・天文学のアカデミアが付設され、一六一三年ごろまで存続し、後陽成天皇が秘かに訪ねられたこともある。このコレジョの付属印刷所でイミタチオ・クリスチの和訳「こんてむつすむん地」が一六一〇年に出版(天理図書館蔵)、一六一三年までには新約聖書も出版されたが、後者は現伝しない。

### 迫害と殉教

一六一二年春、幕府は直轄地にキリシタン禁制を発した。当然、京都もその対象であったが、所司代板倉勝重は教会に好意を寄せており、南蛮寺も破却を免れていた。が、一六一四年一月末、崇伝起草の全国的キリシタン禁制文が發布され、大久保忠隣が上使として二月二十五日入洛。翌日には市内の四教会と修院とは早速焼き払われ、パアデレらは国外追放、信者たちは手当り次第に捕われた。上使は処刑を主張したが所司代は改心せしめようと、倭責めという方法を案出した。それは信者の首だけを出して倭づめにして積重ね、下積みの者が苦痛の嘆息を上げると改心したと称して転宗証文に書込むというやり方であった。そのおもな場所は三条河原であり、五條にかけての処刑の十架が不気味に並び立っていたという。

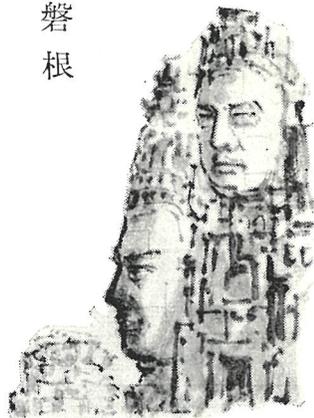
転ばぬ主立った信者らは津軽に、そして後には国外に追放されたが、一六一八年から所司代も嚴罰主義を採らざるを得なくなり、まず、フランシスコ会士フワン・デ・サンタマルタが洛中引廻しの上斬首され、翌年には大

うす丁に大手入れがなされ、獄死する者もあった。この牢の所在は未考である。十月六日五十二人のキリシタンらは將軍の嚴命により十一台の大八車に積込まれ、大仏殿に面した河原というから六条・七条のあたりで火あぶりにされた。京都の大殉教である。

一六三〇年代になると幕府のキリシタン取締りは、いよいよ組織的となり、キリシタンは四散・潜伏し、表面上はまったく姿をかくしてしまった。最後に興味深い事件を付け加えて置きたい。十八世紀の末、水野軍記らがマテオ・リッチの「天主実義」や「畸人十篇」を秘かに入手して、天主教信仰に達し、五条醒井や不明門通松原下などを転々としつつ、教えを説き、入門者は若王子滝に打たれて修業、秘密教団を組織した。軍記の高弟豊田みつぎは八坂上町に表面上、稻荷下しに仮託して秘かに門弟を養っていたが、一八二七年露頭し、京坂にわたり数十名が捕われ、獄死四、磔刑三名を出した一件がある。指導司祭もなく教理的には理解不十分というより誤解した面もあるが、京都におけるキリシタン史の結末であり、また新しい時代を告げる先駆的事件でもあった。(校友・立教大学教授)

## 西南アジア旅行抄 (二)

### 住谷磐根



アンコールトム

### 明日の印度を

印度へ出発前のある日、私たちはラルジ・メロトラ駐日印度大使に招かれて、大使の談話を聴くことができました。

大使は、貴方がたは印度の古美術を探勝されるのが目的とききましたが、大いにそのことを歓迎します。印度は文化的に日本と違つて大変遅れているところが多く、その方面のみを指して批評や感想を述べられることはまことに残念です。たとえば日本では山間僻地の学童でさえ、タゴール、ボース、ガンデー、ネールらを知っていてくれますが、印度では日本のことを知るものはほとんどな

い。われわれは明日の印度、五十年、百年後の印度を……ということを目下真剣にやっています云々と、いわれました。

私はそのことを印度旅行中忘れませんでした。成る程、現在、王朝時代の庶民の窮乏の生活を見ました。薪木を使わず牛糞を壁や石にたたきつけて乾して燃料にし、食器を用いない食事、牛と人間の雑居の生活、紙といふものを使わない日常の生活、物乞いに明け暮れし、あるいは一日中歩きつづける遊牧の民等。日本人を知らないで物珍らしく集つて来る田舎の村人たちです。しかし都会の学生や青年の中には、親しげに会釈して行きすぎるものもあり、親しげに近づいて来て、こちら

から話しかければ……日本は偉い国だ、お蔭で印度も独立の機運に恵まれたのだ……というようなことで握手を求める青年さえもありました。

ガンガ河民族意識湧くたむろ  
菩提樹の憩甍細亜の血が通う  
わがお守ヒンズー黙し合掌す

北印度の原野を走つて、ようやくカジュラホーの瀟洒なホテルへ着きました。

翌朝ホテルの庭の木蔭に食卓をしつらへて、朝餉の最中に、ボーイが持つて来た印度の新聞の第一面に大きく「米国大統領ケネディ氏暗殺さる……」という記事が載つていて一同びつくりしました。真疑の程があやぶまれて色々の憶側で語り合いましたが、急に悲痛な空気になつて食事をやめて、静かに黙禱を捧げるのでした。

朝爽の庭風なく一輪大地に落つ

### カジュラホーの寺院

カジュラホーのヒンズー教寺院の遺蹟は、チンデラ王朝の九五〇年から一〇五〇年までの百年の間に、約八五の大神院が建てられたと伝えられますが、今は二〇余が三群にわか

れて、それぞれ広大な寺院の中に、百メートル位つつ離れた位置に聳え立っている。

一つの基壇の上に玄闕、集会殿、本殿と次

第に塔が高くなって、シカラと呼ばれる形の頂上まで、びっしりと隙間なく彫刻で積まれ、中腹は三段に男女立像がボリーム強く彫り込まれ、ことにヒンズーの特色といわれるミットウナーと称される男性性活動の裸像が実に美事な彫刻で、ギリシャ彫刻や後年の仏教彫刻と異つて、ウエストを細く、ヒップを肥満に誇張し、乳房はマリを当てたように丸く大きい、大腿部から足先へはスラリと柔かく直線的で、顔の表情は感謝、愛と喜びに満ちあふれた温か味のある表現で、いやらしい感じが不思議とおこらない。その立派な群像には堪能させられました。堅い砂岩の異つた色質が組合わされて、寺院全体が活動的な盛り上りを示している。

規模の壮大にも圧倒されるばかりです。

夏空に聳えひしめく石彫裸婦

夏日灼けヒンズー群像眺めく

裸婦石像夜の慟哭を聴くひびき

悠々千八百年の昔、この大量の石をどこから運んだものか、石工数千人が百年余りも次々の世代に引きつがれながら、ヒンズーの呪文を唱え、刻む信仰の姿を想像しました。

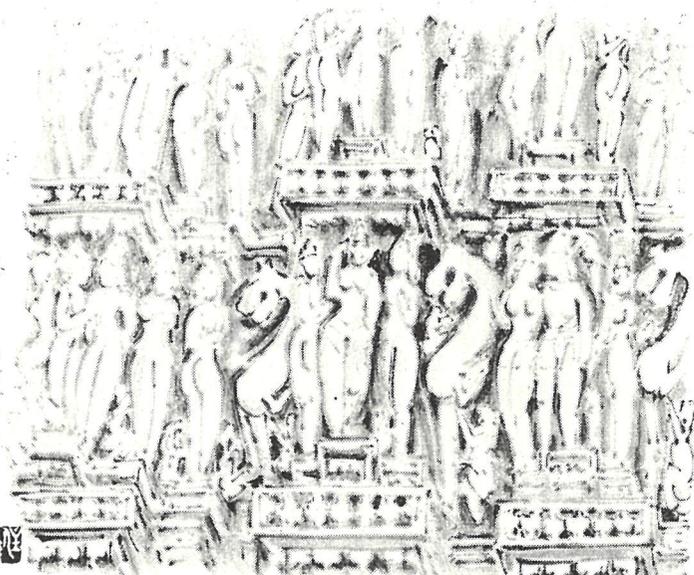
荒涼とした北印度を再びアラハバートへ車を馳せて、ニューデリーへは印度国内機で向いました。

機影今密林を撫で砂漠まで

雲上を行くを印度の地図計る

### ニューデリー周辺

ニューデリーは文教、政治の中心として道路の清潔、壮大な政庁と近代建築、首都として面目が鮮かで、十三世紀以来幾多興亡が繰り返かえされたのも、ガンガ河平原は印度の穀倉の中心部と目を付けた王朝時代からで、ここにムガル帝国皇帝シャール・ジャハーンが完成した旧デリーには遺蹟が多く、クトプ・ミナールは高さ七一メートル、色彩豊かな砂岩の多面的筒形の塔で回教模様が細密に刻ま



カシユラホー

れ、代表的回教建造物として、八百年後の現在まで鮮かな美しさを誇っている。シャー・ジャハーン宮殿レット・フォードは五百年の歳月を費したものの、ムガル帝国二代目の王フマーカンとその妃の墓、十八世紀に造営された天文台の幾何学的造形の妙、印度第一の富豪ビルラが寄進したジャイナ寺院クラシュ・ナラヤン寺、ガンガ河畔のガンディーの墓等、連日の観光でした。

#### 宮址灼け興枯盛衰夢遙か

ガンディーの奥津城の土いま踏めり  
デリーから車で三時間余り、アグラはムガル帝国の首都でイスラム文化の遺跡が多く、タジ・マハルの陵廟は回教建築として世界的に有名なものでシャー・ジャハーン皇帝が愛妃を悼み、建てられた総大理石、象嵌の壮麗な大ドームの模様と幾何学的庭園とその池に映したドームの影は、神秘的でとくに月の夜が観光客を喜ばせる。

#### 空碧く白亜のドーム眼に痛く

炎暑いゆき世紀を眠る棺をみし

#### 汗の日々慕情懐古の旅つづく

印度大使館からの通達で、政府の事務官の女性がホテルに私たちを訪ねてこられ、翌日

はデリー在住の画家たちと引き合せてくれました。美術館に幾部屋かの画室が画家のために与えられて、有望な画家はそこに集って研究に励げんでいる。彼らは古典的印度の美術よりも抽象的な画家が多く、私たちは東洋美術の重要性を彼らに語りました。

#### ボンベアの街並

印度は二千年以上の昔から煉瓦が焼かれ、古い城砦の高い煉瓦の門に至ると、トロイの昔の戦の旗や鋒を持った騎馬武者の列が、物々しく出はいたりする様子を連想するにふさわしい古城や遺蹟が多くありました。

トロイの騎馬古城のトリデ見し夜の夢

ボンベイへ飛ぶ日アラビヤ海碧し

汗に耐え通けきを来しアラビヤ海

ボンベイのランドマークと呼ばれ、パリーのナポレオン記念凱旋門をかたどったといわれるボンベイの門、これはジョージ五世とメ



エレファンタ洞窟の壁面

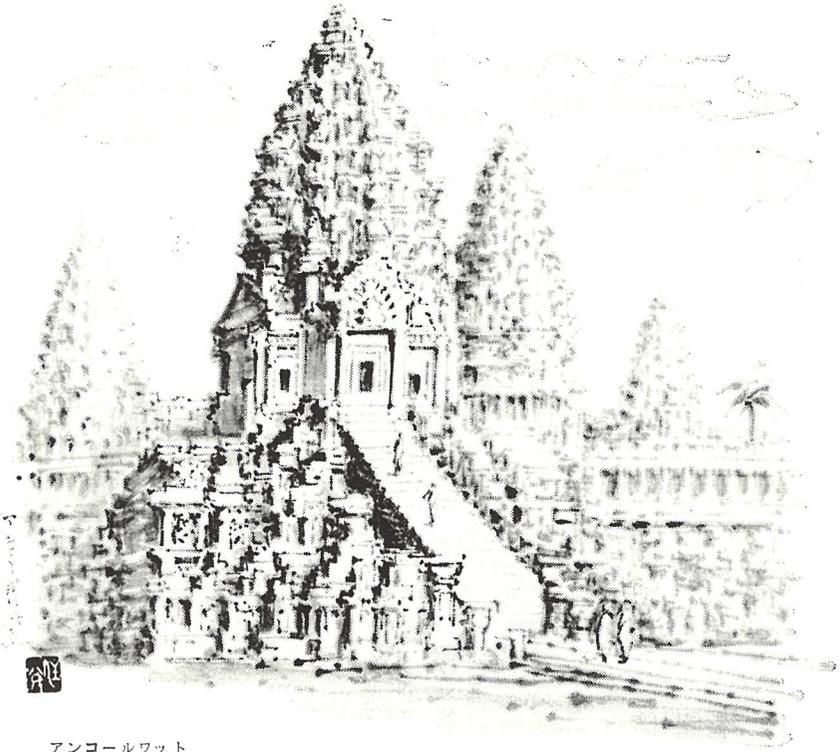
リー皇后が印度訪問の際、上陸地点として記念に建てたという門を見降せる位置のタジ・マハールホテルに泊る。

#### ベンガルの風テラスに受けて雅俗の談

十六世紀ポルトガル人たちによって開かれた港町が発展した街だけに古風な町で時代の変遷と長い町づくりのありさまが、一つのボンベイによって象徴される。それ程に都市形態に変化がみられる。印度第二の人口、都市集中の人口の混雑で、ことに華僑と呼ばれる地域が最も活気に満ちて殷賑を極め、印度の経済はここ華僑でまかなわれていたのではな

いかという印象を深くしました。

しばし駐車華僑の人出目にあまる



アンコールワット

若き欲りボンベイ人の出盛る刻

ボンベイでも博物館は素晴らしい蒐集で感謝しました。それに共同洗濯場は世界的に有名なこと、広大な場所に集められた全市の洗濯物、幾千人かの作業員で、それを見物するベンチが用意されて観光の名所になっているのも奇観でした。

エレファンタ島は凱旋門の下から舟で一時問余の海上の彼方の離島で六世紀、七世紀の洞窟彫刻はこの度の私の旅行中の白眉の一つでした。空路オーランガバードへ飛び、デカン高原のアジアンター洞窟の二十九の大洞窟美術は、その壁画が奈良法隆寺の壁画の源をなすといわれ、惜しむらくは色があせ、剝脱し、往時の美しさは失われていた。

深い大きい峡谷の石壁に、かくも壮大な石刻群は偉大な文化遺産であります。

デカン高原帰途月の出となりけり

今宵旅愁またたくは南十字星

セイロン、ラングーンを経てカンボジアのアンコールワットの見学を楽しみに印度を発しました。

(東洋画研究家)

## ユダヤ人・日本人・同志社人

### 宮 沢 正 典

ナチスの親衛隊中佐・ユダヤ人問題責任者アドルフ・アイヒマン逮捕と裁判は、ユダヤ人と直接関係のない日本人の間に、かなりの波紋を残していった。この事件を契機に、出版された関係書や、ジャーナリズムの記事の量はたいへんなものであろう。素直にみれば、この関心の高まりは、過去にたいする晩鐘であり、また弾劾でもあるべきものだ。しかしそこには、例のわれわれの物見高い興味はなかつただろうか。その種の観衆には責任はないものだ。現象面の興味にとどまったのではないだろうか。映画でも、「アンネの日記」「十三階段への道」「ワルソー・ゲット」「夜の霧」「我が闘争」そして「栄光への脱出」と一巡した頃、一九六二年秋、私は高校三年生と大学四回生を対象にアンケートをとったことがある。二、三を御紹介して話を進めたいと思う。

「現在、ユダヤ人の国家の有無を問うたところ、二五〇人中、有りとするもの一六九、無しとするもの六一、DK二〇。」「その国名に答えたもの一三七、誤れるもの七、DK二五。」「この国について知れること」を述べてもらったところ、一応うなづける説明をなしたものの一四、極めて不十分なるもの三八、誤り七、DK一〇であった。まして、「ドレフス、シオニズム、ヘルツル、バルフォア、ヴェングリオン、キプツ、モシャヴァ」等々を理解するもの皆無に近かつた。「ゲット、アウシュヴィッツ、我が闘争」なども、ほとんどが映画による知識をでるものではなかつた。また「エルサレム」を、イスラエル共和国の首都と答えるものよりも、歴史上宗教上の聖地とするものの方がはるかに多く、それは一般高校生よりも、同志社の生徒に目立つたのは印象的だった。

また、同年春、文学部の秋田清先生の、同志社大学一回生にたいする、民族感情調査によると、一二民族（米、英、仏、独、伊、印露、支、猶、黒、韓）にたいする好悪の順位、結婚希望の順位はともに、ユダヤ人が第九位であつたという。この順位決定に、彼らは何を基準としたのだろうか。

ながながと、高校生、大学生に登場ねがったのは、新しい世代のユダヤ・イスラエルに関する知識は極めて少ないものだろう。一般の日本人についても、そう変わらないのではないだろうか、ということを感じていたためである。

わが国には、大正中期と第二次世界大戦中とくに後者では、今日をはるかにうわまわるユダヤ関係書が出版されていたし、講演会も催されていた。前者は、いわゆる「猶太禍」を訴えるものと、これに反駁するものと均衡していた。後者では、「反ユダヤ論」が国家権力化していき、反駁論は姿を消してしまつていった。反ユダヤ論が戦争遂行の一イデオロギーを形成していったことを考えれば当然だろう。彼らの目標にあわなないものは、「国体否定の思想」「不敬思想」を内蔵するものと

して、無差別に槍玉に挙げられた。たとえば、「ミッション」学校の学生、生徒の中には、日本人であることを忘れて、神社参拝を拒否し、軍事教練に反対した不心得な者さえ出現した……一体ミッション学校は米、英、ユダヤの立派な謀略機関であつた……こともあろうに、欧米ユダヤ思想の母体であるキリスト教主義に基づいて教育されては、日本民族の将来は暗黒が衰退あるのみ……皇国日本において……邪道、非日本的、毒素のような……キリスト教主義による教育はこの際……国家と民族のために厳禁すべきである」（武田誠吾・新聞とユダヤ人・昭和19）という極論が、公然となつた。彼らにとつて好ましくない現象は、すべて、ユダヤの国際的謀略に帰せられるのはご愛嬌だ。だがそれを受けとめなければならなかつた当時の関係者は、それでは済ませなかつたはずだ。末光信三先生のお話（新島研究・二七号）をうかがうだけでも充分理解できる。ただし、戦後の安堵が、われわれにとつて終点であらうはずはない。

最近のユダヤ問題への関心は、わが国自体の問題として、発生したものは、いいがたい。猛威をふるつた戦中のユダヤ論議も、じ

つは、ナチス・ドイツのイデオロギーに呼応するものであつた。その土壌は、大正期の「猶太禍」論によつてつくられていたのであるが。しかも大正期のそれさえも、輸入され日本化されたものであつた。つまり、「世界的謀略」として、終始罵倒され続けてきたユダヤ主義であるにもかかわらず、じつは、反ユダヤ主義こそ国際性をもつていふといつていい。例の一九五九年末以来の、西ドイツに発生したユダヤ人排斥のかぎ十字落書き騒ぎの拡大（わが国でも行なわれたし、同志社の校内でもみかけた——まったくのいたづらだろうが）。アイヒマン処刑後のネオ・ナチズムの報復戦がアルゼンチン（タクアラ団、国家主義復興同盟）、アメリカ合衆国（ワイラデルフィア・ナチ党）、イギリスなどで、連鎖反応のように報告されていることは、その国際性を物語っている。また現今の西ドイツにおける各種世論調査によると、依然として、反ユダヤ主義的反応は極めて大きい。たとえば、東北大学の宮田光雄教授によれば、ナチズムの反ユダヤ主義は、変容しつつも、一般

ドイツ人の意識の底に、分散して「復員」させられているとのことである（西ドイツ——

その政治的風土——昭和39年）。その西ドイツへ、東欧諸国の反ユダヤ運動をきらつて入国する人口があるのだから複雑である。反ユダヤ主義はナチズムのみの専売ではない。こうした傾向は、いろいろな機会に知られる。どこからでも、何かの理由のために、そうした思想が、再び核分裂をはじめるとき、われわれの経験した、過去の現象と無縁だろうか。戦後の平安を終点として、安堵して過ごせなくならないだろうか。

ユダヤ人口をほとんどみとせず、ユダヤ人との直接的利害関係をもたないわが国では、この点に関して、独自の問題的発展はほとんどないだろうと思われる。しかるに、その日本で、反ユダヤのフリーメーソン論議が「復員」しているのをみつふるとき、週刊紙のタイトルではないが、われわれにとつてユダヤ・イスラエルは「もつと知つていい民族、もつと知らなければならぬ国」ではないだろうか。一民族が誤解で包まれることが、問題なのだ。最近の事情を恐れるのは愚かなことだが、無知なのは賢明なことではあるまい。

## 病 氣 安 仁

先日、京都よりの帰り、阪急電車にのって東向日町駅までくると、そこから沢山の乗客があり、電車の中はそうとうに混雑してきた。

電車の混雑はいつものことであるが、この東向日町より乗車した一群に、私はふと異常性を感じた。まず一群の人々から受けた印象は極度に疲労しているということであった。うつろな目つき、無気力さ、それになにかやりきれないといった生活への倦怠感と不安感がにじんでいた。彼らの話を聞いていると、

どうやら競輪場で一日をすごしてきたようである。しかも、そこでの一日は健康な一日ではなかったらしいことを感じた。たんに肉体的な疲労感だけでなく、肉面的な疲れが一緒になってあらわれた異常性である。

さて、この種の異常性については、現代人の多くが患われているところである。現代社会のメカニズムの中で、働くことに何の意味も感じなくなっている人間にとって、労働はただ肉体を疲労させ

るだけのことになり、気力を失ってしまっている。

しかも、資本主義的生産構造のうみだす生活の不安感は、ときには精神的疾患にまですすみ、つねにいらいらして落ちつけぬままに社会的適応性を失ってしまっている。

こうした現象は、譬喩的な表現をするならば、人格の病気であるといえる。そしてこの人格の病気は、自分のうちにおいておこっており、また家庭の中にも、学校においても、さらに職場や社会の至るところで、われわれを思わしている。

こうした病根がどこにあるかについては、今日、哲学の立場からも、宗教の立場からも、また、社会科学や精神医学などの立場から、いろいろと研究されている。そして、その諸研究が共通して問題としていることは、人間疎外の現象であり、しかも、この人間疎外について何かをしなければならぬということがかつてないほど大きな問題となっている。いろいろな治療法が提案されたり、学校教育の方法上の改善がとりあげられたり、職場においては人間関係のあり方が問題となっている。こうしたいろいろな努力がなされつ

つあるにもかかわらず、現実におけるわれわれは、生命的に弱体化してゆくかのようである。

最近、青少年の非行化が激しくなり、家庭教育、学校教育の重大性が論じられるとき、教育が現実の青少年の非行化にどれだけ対処しているかを反省してみると、実にさびしさを感じる。今日、多くの学校は問題児にたいして全く手をやいている。のみならず、問題児を学校からしめださざるをえない状態である。中学や高校における生活指導の問題の中にはかならず問題児対策があり、学校によっては、指導のすべてが問題児対策である場合もかなりあるようだ。

一般に学校における指導は、校則と強制によるものが多く、ガイダンス的要素、カウンセリング的要素が少ない。したがって教師と生徒との肉面的融合が困難になっており、場合によっては、教師の指導が逆に生徒を教育の場から外へ外へとはじきだしてゆくようなことさえある。

青少年の非行現象を問題にしない人はいないと思う。それにもかかわらず多くの場合、その対策はきままって消極的なものとなり、さ

## 人 格 佐 野

らには自己防衛策となつてゐる。

この現実を意識するとき、苦しみの種になることは「もつと、どうにかならないか」ということである。

現状の文化の文化形態の中で起つてゐる事態の中、「もつと、どうにかならないか」という生命的願望は、実は現実の自己の姿との間に苦しい内面的葛藤となる。しかもその葛藤を克服しえない場合、人間の諸能力、諸機能は弱体化し正常性を失つてくる。つまり、葛藤のうずの中で生活に対する適応性を失ひ、精神的疾患状態におちいる。

私は、同志社を終えて、中学・高校で八年間、教師として生活してきたが、ときどき教育の中に人間不在を感じるがある。この二、三年來の高校生の増加にもなうすしづめ教室の中で、教師と生徒との人間関係は著しく歪曲されている。両者の関係がときに売買関係におきかえられている。知識の売買関係である。人間関係が商品関係になり、教師

は生徒に知識を売ることだけに徹し、生徒はそれを買うこと以外には全く教師の指導をうけつけない。両者の関係をすべてこの商品関係で割りきることは、もちろんできない。生徒自身の生活感情が打算的に割りきつた合理主義であるとも考えられないし、また教師が現状に満足しているはずもない。むしろ教師が現状において、やむなくそこに妥協しているといった状態なのである。しかも、その状態が時間的に継続すると、教師の自我感情は自責や悲観となり、さらに卑屈、気兼ね、そして絶望、厭世となり、自己の生活の中に異常性を産む結果となる。教師の取越し苦労が教師自身の異常性となるのである。この現実は無視できない。教師が現実の中で自己実現できないということが問題だと思う。

キリスト教主義学校においては、「教育は人間を創造するのではなく、教育にとって人間は与えられた対象である。したがって教育は創造された人間の人格を自覚させ、キリストによる生活を訓練し、キリストを通して神と交りうる、また語りうる人間性を問題とす」とされている。「人格は、神との交りにより神に生かされて生きる主体である」とい

われながらも、そのような人格が、私自身に形成されているかいなかを、反省せずにはおれない。

今日、教師がまず生かされる必要がある事態であり、教師が自己の人格を自覚せねばならないという大きな課題にせまられていると思う。何度もくりかえすことであるが、日常環境の中にあつて自己疎外にせまられつつ生活している者にとっては、外飾のほらいのけられた、神との内面の交りが必要であり、それによって自己を実現することが、今日の精神的疾患を克服する一つの道であると思ふ。たんに科学や、技術にもとづく自己実現の可能性は、人間の人格が物質的にあつかわれているという不安感を生じさせる。そしてそのことは逆に自己挫折の方向におちいつてゆく。自己の人格が受け入れられないという不安感は人間にとって深刻なことである。

文化的領域にある教育は、神のさばきと恵みによって撰取更生されたところの新しい生命に生かされているという自覚こそ必要事態である。